岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第18号
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.18
1－10, March 2016

退職記念論文

平泉藤原氏と仏会

Hiraizumi Fujiwara family and Buddhism Ceremony

誉田慶信*
Yoshinobu Honda

Keywords: *Hiraizumi Fujiwara family , Buddhism city Hiraizumi, Buddhism Ceremony*
平泉藤原氏，仏教都市平泉，仏会

はじめに

いま平泉研究は、まったく新しい段階に入っている。歴史学、考古学、都市学、土壌地質学、植生学、庭園学、建築史、書道・日本文学からの考察、陶磁器やガラス玉の電子工学的分析、さらには、中国・インドなどアジア諸国の研究者との共同研究、等々、まさしく学際的・国際的研究の最先端を平泉研究は、走っている。

このことをわきまえた上で、平泉を研究することは、「東北史とは何か」「そのような東北史を有する日本史とは何か」を明らかにすることにつながる、との視座に私は立つものである。この問いは、今を遡る57年も前に提起された高橋富雄の平泉論でもあった。高橋の奥羽独立王国論（高橋1958）は、今でもその魅力を失っていない。この高橋説の検討から、平泉政権＝院政期国家による北方支配機構とする説（遠藤巌1976）、また藤原秀衡の「平泉幕府論」（入間田宣夫2004）、あるいは平泉藤原政権は「未完の北方王国」なりとする説（斉藤利男2014a）が唱えられた。

もっとも、浅学の私が、このような偉大なる学説に太刀打ちできるものでは到底ない。小稿では、12世紀の藤原清衡・基衡・秀衡の三代、平泉で執り行われた仏会（仏教儀礼）の具体像を整理し直すという素朴きわまりない作業を通し、そこから垣間見られる平泉の仏教、そして奥羽の歴史の一端について、愚見を提示してみたい。仏会に注目したのは、仏教都市平泉を知るうえで、どのような人びとが、どう行動して仏土を成就していったのか、彼らの具体的行いによって明らかにする必要がある、と考えるからである。

第1節　藤原清衡の鎮護国家大伽藍供養

（1）多宝寺と東アジア仏教

文治５年（1189）９月17日、陸奥国岩手郡厨川に陣を張っていた源頼朝に、平泉の僧侶の代表である、心蓮大法師・源忠已講らが「寺塔已下注文」を提出し、寺領安堵を求めてきた。その注文には、都市平泉内の中尊寺・毛越寺・無量光院・鎮守・年中恒例法会・館のことなどが詳細に記されていた。平泉仏教の由緒正しきこと、その歴史と伝統が堂々と謳われていた。この注文を見て、頼朝は直ちに「御信心」を催し、寺領安堵の壁書を円隆寺（毛越寺金堂）南大門に押させた（『吾妻鏡』同日条）。

この「寺塔已下注文」のなかで清衡に関しては、以下のことが記載されていた。すなわち、白河関から外の浜（今の青森市油川）へと延びる奥大道上の一町ごとに、金色の阿弥陀造を図絵した笠卒塔婆を立てたこと。平泉の関山に一基塔を、また寺院の中央に多宝寺、一百余体の釈迦仏を安置する釈迦堂、木仏で構成された胎蔵界金剛界の両界堂、三丈一体と丈六九体の阿弥陀如来像を安置した二階大堂、そして金色堂を、それぞれ建てたこと。宋本一切経も輸入したこと。さらに延暦寺・園城寺・東大寺・興福寺から震旦（中国）天台山まで千僧を供養した、と。それは、清衡がどのような仏教世界を平泉につくったのかを明白に示すものであった。

中尊寺の諸堂のなかで、多宝寺は最初に建てられた寺院であった（建武元年八月日中尊寺衆徒等申状『平泉町史史料編一』）。この寺院では、釈迦仏と多宝仏が並んで安置されていた。この釈迦仏・多宝仏二仏並坐は、『法華経』「見宝塔品第十一」を形象化したものであった。つまり、地中から湧出した多宝塔に見る過去仏多宝如来と現在仏釈迦如来の二仏並坐が、過去から現在への仏の連続性、ひいては久遠実成の本仏たることを示していた。さらには十方世界の無数の諸仏は、釈尊に統合されていくのであった。それは、法華経信仰の中核をなしていた（菅野博史2001）。平泉の多宝寺は、陸奥国を貫く奥大道の一町ごとに置かれた笠卒塔婆阿弥陀如来図象に象徴される諸仏を統合していく意味を有していた。多宝寺は往来する人びとに開放され、普遍的仏教国土構築の象徴的存在なっていた。釈迦の空間的統合性と永遠性、世界性を現実化させた多宝寺は、中尊寺建立時のもっとも重要な寺塔であった。

日本における多宝塔の初見は、藤原道長が、寛弘２年（1005）、藤原北家一門の埋骨所である宇治木幡墓所に建立した浄妙寺に、二年後に建立・供養した多宝塔である（川勝賢亮 1984）。しかし、このような純粋天台系の二仏並坐の多宝塔は傍流となっていった。院政期仏教世界

* 国際文化学科

においては、京都白河法勝寺の八角九重の大塔や高野山根本大塔（真言密教系多宝塔）に見られるように、真言密教が主流をなしたのである。

しかるに清衡は、純粋天台思想ともいうべき「東アジア国際様式多宝塔」を建立していた（斉藤利男 2009）。二仏並坐の多宝塔信仰は、中国の雲崗や龍門・敦煌石窟でも見られ、また、中国「五代十国」の一つ閩の王審知によって「報恩定光多宝塔」が建立されていた（入間田宣夫 2007）。さらには、新羅王朝時代、韓国慶州の仏国寺にも多宝塔が建造されていた。日本国内では傍流であってもアジアではむしろスタンダードな釈迦多宝塔信仰を取り入れたところに、平泉仏教世界の特色がある。東アジア仏教世界と直結するという平泉仏土は、王都を中心に展開していた仏教世界からの相対的自立につながるものであった（誉田慶信 2010）。

さらに注目されるのは、顕密主義にみる王法仏法相依の一大支柱をなす神祇思想のあり方である。つまり、王城鎮守は、院政期中央祭祀体制の核となって天皇・都を守護していたが、わけても一位の伊勢神宮、二位の石清水八幡宮、そして京都の賀茂社こそは、決定的に重要な位置にあった。しかしながら、これらの神社、さらには摂関家藤原氏の氏神である春日社さえも、平泉には勧請されなかった（斉藤利男 2010）。平泉は、王都とは異なる宗教構造を有した、日本史上、類い希なる仏教都市であった。

（2）平泉の千僧供養

大治３年（1126）３月、平泉では「鎮護国家大伽藍」の落慶供養が執り行われた。その時、京都の北京三会の一つ円宗寺法華会を勤めた延暦寺僧の相仁が導師として平泉に招請され、落慶供養の願文を読んだ。この時、供養願文を起草したのは、当代きっての儒者・漢学者の藤原敦光であり、願文を清書したのは、これまた能書として有名な藤原朝隆であった。いま、中尊寺に所蔵されている「供養願文」には、北畠顕家が写した「顕家本」と、朝隆清書本の模本である「藤原輔方本」の二つがある。「輔方本」は、朝隆清書の正本を忠実に書写したものであり、良本である（名兒耶明 1978）。

「中尊寺建立供養願文」（以下、「供養願文」とする）は、前後に二分できる。前半では、釈迦三尊像を安置する三間四面檜皮葺堂、三基の三重塔婆、紺紙金銀字交書一切経を納めた二階瓦葺経蔵、二階鐘楼、のそれぞれの建立、園池の造成、そして、千人の僧侶による法華経読誦（千僧供養）、530口の題名僧による一切経会の、七つの善根とその有する意味内容を、後半ではこれらの善根をうけて、鎮護国家大伽藍供養の発願旨趣を記す。

「供養願文」を起草した藤原敦光は、都の御願寺や仏会の願文起草に数多く携わり、さらには、詔書の作成、改元にともなう新元号の候補の進言、親王宣下にも関わった、院政期社会の鴻人であった（大曽根章介 1997）。この敦光によって起草された「供養願文」の修辞には、仏教経典からの引用は当然のこと、広く中国の漢籍からも引用されていた。例えば、「供養願文」の「明時」は『後漢書・班固伝』を、「従風如草」は『論語・顔淵篇』に載る「君子の徳は風なり、小人の徳は草なり」を、「寧息」は『史記・秦始皇紀帝』を、それぞれ踏まえたものであったし（大矢邦宣 2004）、「聖代之無征戦」の表現は、白居易の「新豊折臂翁」の一説、「蓬莱殿上、日月之影鎮遅」は、白居易「長恨歌」の「蓬莱宮中日月長」からの引用であった（誉田慶信 2013a）。

平泉の鎮護国家大伽藍落慶供養にあたって、千僧供養、万灯会、一切経会の、三つの仏会が勤仕された。それは、京都や南都などの大寺院、御願寺以外では希有の仏会であった。この三つの仏会のうち、一切経会は、二階瓦葺き経蔵に納められた紺紙金銀字交書一切経を用いての供養であった。一切経は、530口の題名僧によって、一人あたり10部の経典の唱題がなされた。院政期社会の諸仏会に参会した題名僧の人数は、30から50名を通例としたことからも、この530名もの題名僧は、破格のことであった。そもそも、紺紙金銀字交書一切経は、日本では平泉以外、類例がなかった。平泉のそれは、中国五台山の金銀字交書一切経に学んだのであり、このこと自体、正六位上の官位しか有さない藤原清衡にとっては、これまた破格のことであった。清衡がこのような金銀字交書一切経写経を成しえた、その背後に白河上皇の意向あり、とする見解もある（菅野成観 2002）。

大治元年３月、平泉の落慶供養の夜には、万燈会があった。「宝池」の水面に映じる千万の灯火は、無明の世界に生きる衆生に、もう一つの浄土（仏土）を感得させるものであった。浄土を現出させた万灯会と言えば、治安３年（1023）３月10日の法成寺での万灯会が有名であり、その情景を『栄花物語』巻19では、次のように記していた。「こよひのともしびのひかり。十方浄土のほとけのせかいにいたるらんとみえて。かみはひさうてんまでにいたるらんとみえ。しもは黒闇の衆生もみなてらさるらん」と。

都の外、地方でおこなわれた万灯会といえば、なんといっても治承元年（1177）10月13日、平家一門の厳島神社参詣にさいしてなされた万灯会が有名であった。同社眼前の水面だけにあらず、大鳥居の外浜、東の宮崎と西の西崎との間を大鳥居の外を通って結ぶかたちで海中に棚を結びわたして松明を設け、さらには対岸の浜にも数十町に及んで松明を点ずるという壮大な光のページェントが繰り広げられたのである。その仏火に結縁せんとする無数の人びとで、用意された板敷はおろか浜辺においても立錐のすきまもなかった（「伊都岐島社千僧供養日記」）。平清盛は、宋との通商に情熱を有していた。福原の千僧供

養と万灯会は、広範な人びとに「平家こそ海路の安全保障を実現する力である」と印象づけていた（髙橋昌明 2007a）。

一方、北方世界から奥大道をへて平泉へ、そして、京都・博多・寧波へと交易通商世界に生きる藤原清衡の主催した平泉の万燈会。奥大道を通行する商人・僧侶・武士らに、清衡こそが奥羽・北方世界の安全保障を実現する者なり、ということを印象づけていたに相違ない（誉田慶信 2013b）。

また、平泉の千僧供養は、1126 年３月鎮護国家大伽藍落慶供養のハイライトであった。千口の僧侶による法華経読誦の声は「聚蚊之響」をなして雷のようであり、千僧の声は天に達した、と「供養願文」には記していた。千僧供養こそが、奥羽をして「界内の仏土」と言わしめたのである。この千僧供養は、正六位上の官位しか有さない藤原清衡では通常かなうべくもない、破天荒なものであった（入間田宣夫 2014a）。そもそも、千僧供養行われた寺院は、京都の大極殿や法勝寺・延暦寺、南都の興福寺・東大寺であり、主催者も天皇家や摂関家であった。公家沙汰や院家沙汰による組織的運営体制があって初めてなしえたのが、千僧供養であった（遠藤基郎 2008）。

このような千僧御読経が、京都と南都以外の地では行われたのは、平氏政権下の福原・安芸厳島神社と藤原清衡の平泉であった。平清盛は、仁安四年（1169）３月 21 日に福原に後白河上皇をまねき千部法華経をおこなっている（『兵範記』同日条）。以後、安元３年（1177）３月３日まで、清盛は後白河上皇を招き５回の千僧供養を催している。千僧供養に招請された僧侶も、園城寺の僧綱・有職、延暦寺の覚快法親王、仁和寺守覚法親王など、まばゆいばかりの豪華キャストであった（『帝王編年記』承安２年 10 月 15 日条）。福原の千僧供養は、入宋貿易の安全、国際通商の平和を祈願する平氏政権の政治戦略であったという（髙橋昌明 2007a）。

元永元年（1118）２月 21 日京都法勝寺の千僧供養では、金堂の東西廊に各々350 口、金堂中に 300 口の僧侶が着座した（『中右記』条）。法勝寺の金堂の翼廊は、22 間であり、毛越寺の円隆寺と同じであった（大矢邦宣 2004）。千僧が集う堂宇・庭は、それに相応しい広さを有していたのである。このような仏会は、儀式次第の故実を熟知した公卿によって事前に作成された供養式に基づき、整然と挙行された。楽が奏でられるなか、公卿たちは所定の座につき、舞が奉じられ、僧侶の読経や行香、行道、願文奉読がなされた。楽は仏土空間を表象する上で重要であった。

法会の場で繰り広げられた楽の光景を、『中右記』長承元年（1132）２月 28 日の法成寺東西両塔供養から垣間見てみたい。同年２月 22 日に藤原宗忠が藤原忠実のところに参上し、関白藤原忠通とともに終日、塔供養沙汰をなし、翌日には忠実の命により供養式を宗忠が作成し、26 日にはその式に基づき「習礼」（予行演習）がなされた。28 日の寅の時、西塔に金剛界大日四体、東塔に胎蔵界大日四体を安置し、神分ののち、長い供養の法会が開始された。忠実・忠通らが南大門四腋門から入ると龍頭鷁首が河水楽を奏し、さらに東庭に進むと、楽屋で発声があり、この間に忠実と中宮聖子が御塔の前を経て南仮屋御所に入り、左大臣藤原家忠以下の公卿が着座すると乱声、舟楽をやめる。童二人が前庭に進出し、奏し終わると舟に乗り退いた。そして、左右の楽人が楽屋より出て、調子、一越調で楽器の音調を整えた。南大門の左右戸を出て衆僧を迎えた。まず音楽を発した（安楽鹽、楽行事が菩薩・鳥・蝶をつれて共にした）。舟楽も同音で奏でた。楽人らは本道を経て楽屋の前に立った。この間、楽はやまなかったと。衆僧の先導においても楽は重要な役割を担った。まさしく、楽は供養進行の人びとの動きに応じて、瞬間の仏事空間を構成する上で決定的に重要な役割をはたしたのである。

園池は、楽が奏でられ、仏土空間、「宝池」を構成する上で必須の要素であった（誉田 2013ｂ）。平泉の鎮護国家大伽藍落慶供養でも「供養願文」にあるように、36 人の舞人・楽人が仏会の時と空間を区切る重要な役割をはたした。園池に浮かぶ龍頭鷁首から楽が奏でられていた。千僧供養とは、壮大な一大仏会であった（誉田慶信 2013）。

大治元年（1126）３月「鎮護国家大伽藍」で挙行された千僧供養とは、明らかに京都の王朝政権を意識し、さらには京都側からも千僧供養であると認識されていたのであり、千僧供養の名にふさわしい大法会であった、と私は考える。都からはるか遠く離れた平泉で、広大なる北東北地方、蝦夷地に対する実効的支配力を有し、北方世界の覇者として仏教世界をつくりつつあった平泉藤原氏は（斉藤利男 2011 年）、「現実」として千僧供養を行い得たのである。

そもそも藤原清衡は、30 年近くにわたって延暦寺千僧供養のため、財政援助をし続けていた。清衡は陸奥守源有宗と結託して、比叡山千僧供養のために、と公領の田地を取り込み、「保」をたて、ついにはその広さは 700 町になった。そして、陸奥守藤原良兼に、その公田横領の非法を朝廷に訴えられる、という事態を引き起こしていた。陸奥国に下り立保に活躍していた日吉神人が、国司方に殺害されるという事件も起きていた（『中右記』大治２年 12 月 15 日条）。

また藤原清衡は、園城寺・東大寺・興福寺千僧供養のために金を送っていた（『吾妻鏡』文治５年９月 17 日条「寺塔已下注文」）。さらにはこれとの関わりで、『古事談』巻５の 34「三井寺鐘の由来の事」の説話もあった。つまり園城寺にある竜宮の鐘は、もともとは粟津に住む粟津冠者なる武者が龍王からもらいうけ、建立した広江寺に鉤してあったものであった。藤原清衡が園城寺の僧侶千人に施した砂金千両（千僧供養）のうち、わずか 50 両でもって園城寺が広江寺から購入した、と。平泉藤原氏と園

城寺との密接な関係を示す好事例である。それだけではない。中国天台山国清寺の千僧供養のために、清衡は奥羽の金を惜しげもなく送り届けた（「寺塔已下注文」）。千僧供養の主催者として、清衡の名前は、東アジア仏教世界で認知されていくことになる（誉田慶信 2008）。清衡は、仏教立国をめざす国際戦略を推進していたのである（入間田宣夫 2007）。千僧供養の費用を送り続ける清衡には、北方世界から京都、博多、中国にわたる東アジアという広範囲のなかに生きる通商立国の主たる風貌があった。

第2節　基衡千部一日経と円隆寺額

（1）千部一日経

藤原基衡と言うと、毛越寺を建立したことであまりにも著名であるが、基衡がおこなった仏会として、千部一日経こそは特筆すべきものであった。千部一日経とは、法華経八巻を一日で書写し終える写経供養を千回おこなうことである（田中塊堂 1953）。法華経は八巻二十八品からなる長大な経典であるが、さらに法華経の開経として無量義経、結経として観普賢菩薩経を加えての写経がなされた。一日経とは、まさしくこれらを一日（実質は午前中）で写経することであり、とうてい一人の書き手では不可能であった。鎌倉期の建久年間に成立したという「二中歴」（『改定史籍集覧』第 23 冊）に記載された一日書写法華経支度では、書手 30 人、催２人、調巻師３人としている。膨大な労力と財力が必要であった。さらには、この千部一日経は、単に写経にとどまらず、午後からは講会がなされるのが通例であった。たとえば、久安５年（1149）10 月８日、亡き鳥羽天皇皇女叡子内親王の御月忌写経にさいしては、早朝から法華経の書写が 30 人の経師によってなされ、午の刻に終了、校正のあと調巻され、その後、千日講がなされていた（『兵範記』同日条）。

基衡がおこなった千部一日経では、京都の仏教教学の上層部に位置し、都の大寺院の仏会や講会の問答講などで活躍していた僧侶が招請されていた（誉田慶信 2014）。例えば、保延６年（1140）５月 16 日の基衡千部一日経の問者を勤めた阿闍梨範覚は、三井寺の僧侶であり、大治２年（1127）12 月３日京都法成寺御八講の竪者を勤めていた（『中右記』同日条）。範覚は、藤原氏道隆流の家範の子、園城寺阿闍梨範覚であり（『国史大系　尊卑分脈』巻１）、兄弟には、白河院院司、四位別当として活躍した基隆を筆頭に、家行・家保・宗隆らがいたし（高橋昌明 2011）、妹（姉、あるいは姪か）は美福門院得子の女房となっていた。範覚の兄弟の仁和寺阿闍梨行範は、陸奥国に住んでいた（遠藤基郎 2015。

保延６年７月 11 日の基衡千部一日経で講師、久安４年閏６月 17 日で問者をつとめた増忠は、藤原道隆系の経忠の子であった（『国史大系　尊卑分脈』巻一）。そして、先述の範覚とは、藤原頼宗系の長忠の二姉妹を通じて姻戚関係にあった。つまり、藤原基隆（範覚の兄）の妻は、長忠の娘であり、さらに長忠のもう一人の娘は、藤原忠能（増忠の兄）に嫁ぎ、長成を産んでいたのである。この基隆の妻と増忠兄忠能の妻とは姉妹であった。藤原長忠は平安末期において台頭してきた徳大寺系藤原氏に娘を送り「嫁の家」ともいわれた名門貴族。典型的な弁官系貴族であった。そして、この藤原長成こそは源義経生母常磐の夫であった。源義経と平泉藤原秀衡との接点に、常磐をめぐる女性たちの濃厚な人脈があった（保立道久 2004）。基衡千部一日経の法会を司る導師・講師・問者には、京都の有力貴族出身で、かつ教学体系の上層部で活躍している僧侶が招請されていたのである。

基衡の千部一日経が開始されたのは、保延３年（1137）７月 16 日であった（誉田慶信 2014）。その日は、藤原清衡十回忌の日であった。保延４年５月から保延６年５月まで、ほぼ２年間で 162 部の法華経写経がなされた。ほぼ４日から５日の間をおいて一部写経が行われたことになる。保延６年５月から同年７月の二ヶ月間は、46 部の写経がなされた。連日のように法華経書写が行われていた。基衡千部一日経の後半は、やや写経のペースは遅くなるが、それでも久安４年（1148）閏６月 17 日には、302 部の書写を達成している。

藤原基衡の没年は、相原友直『平泉実記』の保元２年（1157）年とする説や保元３年とする説（斉藤利男 2011、大矢邦宣 2013）がある。推定年齢は、55 歳か 56 歳である。後半の写経ペースである１ヶ月につき三部の回数でいくと、千部一日経が成就するのは、久安４年閏６月から 11 年 10 ヶ月後の 1160 年となる。それは、基衡の死亡年とほぼ同じである。基衡は、生涯をかけて千部一日経を勤仕していったのである。

院政期の公家社会において、千部一日経をなし得るのは上級貴族であり、成就するのは困難をきわめた。しかも紺紙金字写経となれば、さらに意味合いは違ってくる。金泥千部法華経の事例としては、仁平元年（1151）11 月８日、藤原家成が金泥法華経一千部供養をおこなっていた（『本朝世紀』同日条、「濫觴抄」『群書類従』巻 20）。金字法華経一部写経は、院政期公家社会では一般的であったが、家成のこの金泥法華経一千部供養は、当時の京都でも驚嘆されたと思われ、「濫觴抄」に記載されることとなった。この藤原家成こそ、美福門院得子とはいとこ同士。大国受領系鳥羽院近臣、美福門院の中心人物として権勢を有した公卿であった。鳥羽院近臣藤原家成ゆえに金泥法華経千部供養をなしえたのである。藤原基衡の千部一日経もまた、このような金泥法華経一千部供養であった（誉田慶信 2014）。

藤原清衡は、鎮護国家大伽藍を造り、金銀字交書一切経の一切経会と、正六位上ではなし得ない破天荒な仏事である千僧供養を執り行うことで奥羽全体を「平和な仏土」

字法華経書写をなし続けるという、京都の公家でも容易に達成できない遠大な千部一日経を基衡は発願し、成就した。そして、千部一日経には、平泉藤原氏の私的積善に終わらない菩薩道としての意味もあった。恒常的な菩薩行によって、平泉は仏土として荘厳されたのであり、京都政権に「平和」を希求する仏土たることを発信できたのである。清衡の千僧供養、基衡の千部一日経は、その象徴であった。

（2）円隆寺の額

藤原基衡の時代、平泉は、東西路の整備や方形区画を有する計画的都市として、めざましい発展をとげた（羽柴直人 2002）。この都市建設の中心となる毛越寺は、京都白河の法勝寺伽藍を模して建造されていった（清水擴 1992）。八重樫忠郎は、考古学上の発掘成果に基づき、12世紀第３四半世紀前半ころ第１期毛越寺が完成したとしている（八重樫忠郎 2013）。毛越寺（つまり円隆寺）の落慶の時には、壮大な供養法会があったと思われる。この落慶供養にあわせて円隆寺の額が南大門に打たれた。それは、同寺供養の決定的瞬間であった。

『吾妻鏡』文治５年（1189）９月17日条「寺塔已下注文」では、円隆寺に関して次のように記していた。つまり、その前半においては、「鏤二金銀一、継二紫檀赤木等一、尽二万宝一交二衆色一」と円隆寺荘厳の華麗さを表現し、「本仏薬師丈六、同十二神将」を記し、「講堂、常行堂、二階惣門、鐘楼、経蔵」と伽藍を記した後に「九条関白殿下染二御自筆一被レ下レ額、参議教長卿書二堂中色紙形一」と記していた。さらにその後に、薬師丈六仏製作の雲慶への依頼、功物として奥羽・蝦夷地の名産の送付、鳥羽法皇があまりの出来映えの良さに薬師仏の出京を禁じたこと、そこで関白藤原忠通が鳥羽法皇の「天気」を伺い、出京の勅許を蒙り、円隆寺に安置に至った、とするかの有名な文章を続けていた。

摂関家氏長者藤原忠通揮毫の「円隆寺」額は、落慶供養をむかえた日、二階惣門に打たれた。今も礎石が残る毛越寺南大門跡は、二階惣門。二階惣門の寺額は、四足門の門に打たれる額とは異なって御願寺伽藍の威容を放っていたのである。藤原忠通と言えば、平安後期京都にあって、法性寺流の能筆として著名であった。鳥羽から後白河院政期にかけて内裏殿舎門、最勝寺・証金剛院・宝荘厳寺などの寺号額を記していた（小松茂美 1973）。この藤原忠通が、京都からはるか離れた平泉円隆寺の寺号（寺額）を書くと言うことは、異例中の異例であった。寺額は鋭い政治性を内包する文化表象であった（『平家物語』巻第１「額打論」）。円隆寺の寺号は、京都の四円寺を意識して、藤原基衡によって選定されたのである（菅野成観 2002、誉田慶信 2015）。

円隆寺額については、『今鏡』巻五「みかさの松」に、次の一節がある。つまり、仁和寺（覚法法親王）からの依頼で書いた寺額が「をくのえびすのもとひらとかいふがてらなり」と聞いて陸奥へとりかえしの使者（厩舎人）を基衡のもとに派遣したこと。使者は寺額を取り上げ「三にうちわり」帰京した、と。同様の説話が、『古事談』巻第２の24にもあり、平安末期の京都にあって、この円隆寺額に関わる「事件」は評判となっていた。 高橋富雄は、実際のところ寺額はなされず、忠通使者の厩舎人菊方に「黄金の魔性」を駆使する「秘計」（賄賂）によって沙汰止みにした、としている（高橋 1958）。ただし、『今鏡』の史料上の信憑性は決して低いものではない。むしろ重要なことは、寺額を返し奉らじ、とした基衡を「しれごとなり」と戒めた基衡の妻の存在である（工藤雅樹 2009）。かの女は、『古事談』巻４の５及び『十訓抄』下第10に出てくる「女人沙汰」「妻女」と同一人物。平泉藤原氏と朝廷とのあいだに発生した政治問題において、公家政権とわたりあい、基衡を窮地から救った、かの女人（正妻）であった。円隆寺落慶供養が成就した今、藤原摂関家氏長者を敵に回してまで、寺額（メンツ）を死守する必要はない、とする柔軟な政治戦略を基衡に進言した、かの女は、安倍宗任の娘にして、観自在王院を建立した、基衡よりは年長の、スーパー姉さん女房であった（入間田宣夫 2014c）。

一見すると京都の朝廷に服従的ではあるが、実際は、面従不服。京都以上の仏教立国の文化を見せつけ、平和共存を標榜することで、奥羽・蝦夷地の実質的独立性を確保する、という平泉藤原氏の戦略は（大矢邦宣 2004、斉藤利男 2014、誉田慶信 2015）、藤原基衡の時代においても生き続けたのである。『今鏡』に見る基衡に額返納を強要する忠通像と、「寺塔已下注文」に見る基衡の代弁者としての忠通像、という真逆の言説が併存していた。そこからは、京都からの言説を不明瞭にさせてしまう平泉地域権力を見いだすことができる（遠藤基郎 2005）。

平泉円隆寺落慶供養の時、丈六薬師如来が安置された堂中の壁扉ごとに浄土世界を思わせる絵が描かれ、色紙形には藤原教長筆の詞が書かれていた。教長は、忠通の入木の師であり、『今鏡』巻五みづぐさ、には「處どころの額」「みどうのしきしがた」なども書いたという、能書。注目すべきことは、円隆寺堂中色紙形が寺額につぐ寺院荘厳の表象であったことである。そして、それは、藤原基衡の京都に対する外交戦略の成果でもあった。すなわち、藤原基衡は、藤原忠通と相対立する藤原忠実派公卿教長（遠藤基郎 2005）との人脈も確保していたのである（誉田慶信 2015）。忠実（教長派）と親しかった覚法法親王との人脈が一役買っていたと思われる（柿島綾子 2013）。平泉円隆寺落慶供養には、藤原忠通・美福門院のルート一本だけにあらず、摂関家藤原忠実・頼長のルートがあったことを意味する。教長の従兄弟にあたる源忠已講が、秀衡

の招請により平泉に来住していた（誉田慶信 2013）。円隆寺落慶供養のために藤原基衡は、忠実派、忠通派の相敵対する勢力に保険をかけていたのである。このように多面的外交を展開できるのは、その政権が自立的であることを意味する。そして、この源忠こそは、前述したように、文治５年(1189)９月、平泉藤原氏の滅亡によって占領軍の源頼朝方武士団による略奪・非法が繰りひろげられるなか、平泉仏土を守るべく「寺塔已下注文」を頼朝に提出し、寺領安堵を求めた、かのキーパーソンだった。

第3節　奥羽の仏土から京都へ

（1）年中恒例法会と問答講

藤原秀衡が誕生したのは、保安３年（1122）。父である基衡が亡くなった保元２年（1157）には、35 歳となっていた。仏土平泉の為政者として申し分のない成人である。秀衡は、基衡の毛越寺・吉祥堂・千手堂の建立、千部一日経、街路を備えた都市平泉の造成の様相を目の当たりにしつつ成長した。そして、自らも平泉館を改造し、無量光院を建立し、さらに平泉四方鎮守の勧請など、都市平泉の大改造を遂行していった。都市平泉は、衣川北岸の衣川地区、北上川東側の本町地区、さらには白鳥館の工房地帯をも含めた大平泉へと変容していた（斉藤利男 2011）。しかも、大平泉には、八幡・賀茂・伊勢・春日などの王城鎮守を勧請されなかった。前述の通りである。圧倒的に仏教最優先の中世都市、それが大平泉であった。

この大仏教都市平泉では、林立する寺院群の数をはるかにしのぐ仏会がなされていった。秀衡は、祖父と父親が建立した寺院群の維持管理とともに、それらの寺院でなされる仏会勤仕の継承責務も負わされた。基衡が発願した嘉勝寺が存命中に完成せず、秀衡の代になってようやく落慶のはこびとなった。秀衡創建の無量光院だけが、秀衡の仏国土ではなかったのである。

秀衡は、親子三代にわたる平泉の法会・祭礼を「年中恒例法会事」「両寺年中問答講」として整備した（「寺塔已下注文」）。「年中恒例法会事」によれば、平泉では、２月に常楽会、３月に千部会・一切経会、４月に舎利会、６月に新熊野会・祇園会、８月に放生会、９月に仁王会、がそれぞれなされた。その仏会には、講読師・請僧あるいは 30 人、あるいは 100 人、あるいは 1000 人が参座し、また舞人 36 人、楽人 36 人が出仕していた。この法会の中核をなしたのは、平泉のアイデンティティーともいうべき３月の千部会・一切経会であり、これを中心に釈迦の入滅・誕生の法会をおき、さらには攘災・成福の春秋仁王会から秋季仁王会を分離し、さらには石清水放生会とは異なり本来の不殺生戒・生類供養としての中尊寺放生会が配置されていた。まさに自立性と選択性を柱にして、秀衡が仏都市平泉の仏会を編成したのであった（斉藤利男 2010）。

この年中恒例法会は、鎌倉後期には、「六箇度法会」と変化していくが、それでも一切経会は、120 人の講読師・請僧によって勤仕され、出羽・陸奥国各地から参勤した伶人が楽を奏でていた（嘉元３年３月日中尊寺衆徒陳状案『平泉町史　史料編』44 号文書）。この３月一切経会とセットになったのが「千部会」であった。それは、大治元（1126）年３月の鎮護国家大伽藍の落慶供養にて執り行われた千僧供養の伝統を引き継ぐものであった（斉藤利男 2010）。

また、「寺塔已下注文」によれば、中尊寺・毛越寺では、「両寺一年中問答講」が行われていた。その内容は、長日延命講・弥陀講・月次問答講・正五九月最勝十講であった。このうち最勝十講は、年中恒例法会としてではなく、中尊寺・毛越寺の問答講として位置づけられていた。注目すべきことである。この最勝十講に懸けられたのが中尊寺所蔵「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図」（藤原基衡時代の作）であり、そこには、藤原氏の滅罪生善の目的があったとも言われている（浜田隆 1971、長岡龍作 2010）。国家的法会の頂点に立つ最勝講が、年中恒例法会ではなく、問答講としての純粋性を保ちながら、正・５・９月と３回も行われていることに、平泉法会の特色があった。

「両寺一年中問答講」には、長日延命講・弥陀講が選択されていた。長日延命講は、院政期京都で行われていた普賢延命菩薩を本尊とし玉体安穏を祈念する修法としての延命法ではなく、円隆寺・嘉勝寺の本尊薬師如来の教えに係る講説としての延命「講」であった。弥陀講は、仏土平泉に大長寿院・金色堂・観自在王院と小阿弥陀堂・毛越寺常行堂・無量光院の六棟もの阿弥陀堂が存在し、日本有数の天台浄土教の聖地ならではの講会であった。迎講の場としての無量光院は、極楽往生疑似体験の壮大なる装置であったし（菅野成観 1991）、観自在王院は金剛界の阿弥陀像を祀った密教空間、大長寿院は比叡山十界阿弥陀信仰に基づいていた（菅野成観 2006）。「弥陀講」は、前述の６つの阿弥陀仏にわたる講説であった（誉田慶信 2015）。

以上の他にも、平泉には数多くの講会があった。その一つに如意輪観音の前でなされる如意輪講があった。藤原秀衡母は、その講の次第を、かの有名な延暦寺僧澄憲に請託していた。講の次第を記した「如意輪講式」は、惣礼・敬白・教説・回向文を内容とし、特には第六門如意福徳門、第七往生極楽門には天台における弥陀思想が流れていた（佐々木邦世 1997）。平泉の教学問答は、「講式」の模範を京都に求めていたのである。院政期社会において、仏会・講問論議を執り行うべく、数多の講式が作成されていた（阿部泰郎 2005）。まさしく、日常的な教学振興こそが、金字一切経書写（秀衡経）の一大事業とともに、秀衡期の平泉仏土を彩っていたのである。

（2）鎮守府将軍の仏土として

藤原秀衡は、奥羽のみならず、関東・白山・畿内の寺社造営・仏会供養にまで広く関わるようになる。「筥根山縁起」（『新校群書類従』1 神祇部）、「東大寺造立供養記」（『新校群書類従』19 釈家部二）、「白山中居神社本地仏石徹白虚空蔵菩薩坐像」「紀南郷導記」など、平泉側でない、その地の言説・史料に記載されている通りである。秀衡の時代、平泉仏土は、新段階に入ったのである。

特に注目されるのが、承安３（1173）年 11 月 11 日の高野山五大多宝塔内の安置仏である等身皆金色釈迦如来像の開眼供養に要する莫大な費用を、藤原秀衡が請け負ったことである。開眼供養のその日、後に第 28 世高野山検校となる定兼が表白を読んだ（「高野山検校阿闍梨定兼塔供養願文」『続群書類従』第 28 輯上の巻 825『表白集』）。すなわち、高野山五大多宝塔の造営は修したが、等身皆金色釈迦如来像一体は未遂であったこと。「将帥累葉家」の「奥州鎮守府将軍藤原朝臣」がその開眼供養の施主となったこと。秀衡は４年間にわたり衣粮を高野山に送り「三業之精誠」を表したので、「一日之法筵」「無遮之斎会」（開眼供養）を執り行ったこと。秀衡は、300 口の浄侶に財施し、2000 余輩の衆徒に霞飡を施し、高野山の長老を唱導としたこと。また「彼室家」（秀衡正妻、藤原基成娘）と「賢息」（藤原泰衡）が増福延寿のため尊勝仏頂の秘法を修してきたこと。今後はその勤行を高野山に移して永代に期されたい、と。

藤原秀衡は、承安３年を遡ること４年前の嘉応元年末か２年ころより衣粮を高野山に送り続けていた。その作善が高野山側の目にとまり、秀衡の五大多宝塔釈迦如来開眼供養の施主へとつながっていった。この嘉応２年（1170）は、秀衡の一生、平泉藤原氏にとって重要な年であった。同年７月に秀衡が鎮守府将軍に補任されたのである。鎮守府将軍就任とほぼ前後して、秀衡が高野山へ衣料を送り続けたことになる。

そもそも高野山には、藤原基衡が頼りとした仁和寺覚法法親王が参詣を繰り返していた。高野山は、覚法の後継者覚性法親王の育成の場、さらには御室仁和寺に後継法親王を披露する場でもあった（柿島綾子 2013）。そして承安３年、守覚法親王（後白河天皇第二皇子）が高野山で教修中だった。その前で、五大多宝塔釈迦仏開眼供養が行われたのである。平泉仏土の主たる鎮守府将軍藤原秀衡の名を強力に印象づけてやまないものであった（誉田 2015）。当寺の京都では、秀衡の鎮守府将軍補任を「乱世之基」と嘆息する九条兼実のような公家がいた（『玉葉』嘉応２年５月 27 日条）。その冷ややか評判を覆すように、定兼をして「奥州鎮守府将軍藤原朝臣、将帥累葉の家に生まれ、勢徳希世の人」と言わしめたのである。鎮守府将軍であることへの秀衡の強烈なアピールとなった（入間田宣夫 2013、斉藤利男 2013）。守覚法親王を通じて後白河法皇や摂関家へも、秀衡の善行は伝えられていくのである。鎮守府将軍という政治的地位が、秀衡をして奥羽仏土の主から、全国区の造寺造仏の施主へと飛翔せしめたのである。と同時に、それは、京都における政治抗争、ひいては源平合戦の展開なかで、奥羽の仏土を守るべく、よりいっそうの歴史的緊張状態を秀衡に強いることとなった。

（3）村の伽藍と奥羽仏教世界

平泉藤原氏を武力で滅ぼし、平泉を離れる２日前の文治５年（1189）９月 23 日、かねてから宇治平等院鳳凰堂に興味を有していた源頼朝は、宇治の阿弥陀堂を模して造られた平泉の無量光院を拝観している。その時、頼朝を案内した秀衡の旧臣豊前介実俊は、頼朝に、清衡在世 33 年間を「両国陸奥出羽、有二一万之村一、毎レ村建二伽藍一、寄二附仏性灯油一」と述べている。この村ごとの「伽藍」こそが、平泉、そして奥羽が仏教土であったことの何よりの証左であった。類い希なる仏教都市平泉は、「村ごとの伽藍」が点在する奥羽仏教世界の裾野の上に成り立っていたのである。

この村の伽藍を考える上で、近年再発見された宮城県岩沼市志賀の岩蔵寺は、大いに参考となる。同寺は、『封内風土記』によれば、慈覚大師開基伝承を有する天台宗寺院で、いまも薬師堂のなかに丈六仏が安置されている。破損がひどく、阿弥陀如来坐像なのか、薬師如来坐像なのかは、断定しがたいが、紛れもなく丈六仏である。因みに 1968 年に岩蔵寺を予備調査した高橋富雄は、本仏像が一木彫の薬師像で平安後期の作である可能性を指摘し、また、現存する薬師堂は、江戸前期の阿弥陀堂様式建築プランを有すると述べる（高橋富雄 1968）。さらに、近年実施された岩沼市教育委員会による発掘調査で、同寺薬師堂の北側に、板碑を伴う集石遺構と火葬骨片を検出している（岩沼市史編纂室「岩蔵寺遺跡発掘中間報告」2014 年）。

近世に作成された「名取郡志賀村岩蔵寺先年境内分之絵図」には、薬師堂背後の山に経塚があること、またその北には「一切経堂跡」とも記していた。平安後期に丈六仏を安置し、経塚を営み、一切経堂まで備えた寺院とは、伽藍としか言いようがない。平泉藤原氏滅亡の後も、岩蔵寺は仏教聖地として栄え、その霊的空間に結縁しようと、墓所が営まれたのである。同寺の境内は広い。西端には、これぞ岩屋とも言える見事なる岩窟がそそり立っている。岩蔵寺の山号、岩窟山は、この岩屋に因み、「南城了一氏所蔵資料２－１－１」では、「大師（慈覚大師）岩屋」「御禅定所」と記している。寺域の東端は深山権現。北は一切経堂さらなる北の山、南は不動堂に及ぶ。また薬師堂が建つ面より一段低い「字薬師」との小字名を有する一帯には、かつて私院が広がっていた。この岩蔵寺の景観は、まさしく「山寺」そのものであった（誉田慶信 1995）。

この岩蔵寺が位置するのは、名取郡から南下する奥大道から西に分かれて出羽国側へと延びるルート上にあった。奥羽の村ごとに清衡が建立した伽藍とは、岩蔵寺のような寺院が中心ではなかったか。「村ごとの伽藍」とは、小集落にある小堂というレベルを超えるものであったと考える。

「村ごとの伽藍」とは、平泉藤原氏が実際に「創建」したものの他に、奥羽各地の武士たちが直接の外護者・施主となって寺院を創建したもの、あるいは平泉藤原氏の平泉開府以前から存在していた古刹寺院が多くあった、と考える。前述『吾妻鏡』の「清衡創建」「村ごとの伽藍」とされる寺院は、これらの寺院を平泉仏教世界に包摂したものであった。出羽国慈恩寺や立石寺などは、その好事例である。ともに平泉藤原氏によって、寺塔が建立された寺伝を有している（誉田慶信 1995）。

仏土平泉は、都市文化の求心性・先進性を内外に誇示していた（髙橋昌明 2007b 誉田 2013）。この旧稿を何ら変更するものではないが、その上に立ってあえて付言するならば、仏土平泉の求心性の内側に隠れている、前述のような村ごとの伽藍の存在が、平泉三代の奥羽仏教世界の実像であった、ということである。

奥羽仏教世界が、平泉のそれと別な論理で動いていた事例をあげる。比爪氏の仏教文化圏の一翼を担っていた「蓮花寺」の安置仏に、七仏薬師如来像、毘沙門天立像とともに五大明王（不動明王を欠く）があった（ともに平安時代後期の作、岩手県指定文化財）。五大明王のうち、東方の「降三世明王」、西方の「大威徳明王」、南方の「軍荼利明王」、北方の「金剛夜叉明王」は、顕密主義の申し子、夷狄調伏の守護神でもあった。平泉藤原氏の仏教都市平泉は、このような夷狄調伏の思想を有さなかったところに最大の特色があった（誉田慶信 2010、斉藤利男 2010）。しかるに、平泉藤原氏の一族である比爪氏は、五大明王を祀っていたのである。羽柴直人が、比爪を平泉に従属するものにあらず、両者は並立する同等の権力拠点であるとさえ断言する（羽柴 2014）。都市平泉と比爪の宗教構造は、相反しており、矛盾するように思われるが、実はさにあらず。むしろ、平安後期奥羽仏教が、都市平泉の仏教で均一化されていなかった、という事実こそが重要なのである。

福島県岩城地方の、かの白水阿弥陀堂は、秀衡の妹、徳尼が岩城氏の先祖の海道之小太郎業平に嫁ぎ、夫の菩提を弔うため平泉中尊寺金色堂に模して白水阿弥陀堂を建立した、との伝承を有する。しかし、そのよう伝説は誤りであり、白水阿弥陀堂は、中尊寺金色堂には見られない見事な浄土庭園を有し、平泉とは別系統の本格的伽藍として 1162 年ころに建造されたものであり、むしろ平泉観自在王院に先行する阿弥陀堂建築であった（入間田宣夫 2015）。入間田宣夫が述べるように、平泉の統治システムが、奥羽在地世界を覆い尽くしていたのでは、決してない。別言すれば、平泉藤原氏による奥羽仏土世界とは、奥羽各地の武士団が施主となって建立した寺院、あるいは平泉藤原氏以前からある古刹を、「緩やかに統合」していくことで成り立っていたのである。そこにこそ、平泉藤原氏時代の奥羽仏教の特色があったと言わねばならない。

このような奥羽仏教世界のあり方は、平泉藤原氏の権力構造にも相通じていた。文治５年（1189）の「奥州合戦」で源頼朝軍を迎え撃った平泉方の武士は、奥羽の武士団全軍にあらず。平泉藤原氏本宗家・比爪氏・信夫佐藤氏・出羽田河氏・秋田軍の連合体であった（斉藤利男 2014b）。あわせて、頼朝の奥州進軍にあたって、陸奥国府の留守所と次官の陸奥介は平泉方からいち早く離反し、頼朝方に味方していた（七海雅人 2015）。

同年９月、捕虜となった藤原泰衡郎従由利八郎維平は、礼を欠いた関東武士宇佐美平次実政の態度に忿怒し、藤原泰衡は「秀郷将軍嫡流之正統」なり、と弁明し、さらに「二十ケ日内、一族皆滅亡、不レ足レ言」と述べる源頼朝に対して、「尋常郎従、少々雖二相従一、壮士者分二遣于所々要害一、老軍者依レ不二行歩進退一、不レ意自殺」と奥羽軍の現状を述べた上で、源義朝軍は平治の乱で一日も持たなかったではないか、と反論していた（『吾妻鏡』文治５年９月７日条）。10 年にわたる源平合戦で、実戦経験豊かで統率のとれた関東武士団軍と、平泉藤原氏方の緩やかな連合体としての武士団とでは明らかに異なっていたのである。

思えば、煌びやかな仏教都市平泉の中に、「闇」が潜んでいた。そもそも、基衡は、「王土を犯している」という朝廷側の疑惑を晴らすため、もっとも信頼する後見人信夫佐藤氏の首を斬るということまでしていた（『古事談』）。さらに基衡は清衡の次男。次子相続が当寺の武士社会の慣習とはいえ、長男の小館と家督相続争いをし、小館を殺害して家督をもぎ取ったのである。だからこそ、仏教による平和共存、滅罪生善の菩薩行に徹していくこと。法華滅罪の千部一日経を発願し一生涯やり通すこと。内にも外にも仏土成就を発信していくこと。それが、藤原基衡にとって重大事であった（誉田慶信 2014）。煌びやか仏土平泉に潜む政治の渦を見つめることが肝要である。京都王権の威光を受けた最先端の平泉仏教の素晴らしさを「顕彰」するという姿勢だけでは、「都」中心主義の焼き直しに陥ることになる。

藤原秀衡の鎮守府将軍就任は、平家の「六波羅幕府」（髙橋昌明 2013）、後白河院政の展開、源頼朝の挙兵という状況のなかで、秀衡を京都公家たちの思惑のなかに引き釣り混んでいく。秀衡は、仏教最優先主義だけでなく、「平泉幕府」を模索していく（入間田宣夫 2013、斉藤利男 2014）。そして源義経を「大将軍」として平泉に招く、という政治展開へとつながっていく。藤原泰衡の敗死で平泉藤原氏

は滅亡するが、その道は、「武」に秀衡が走り始めた時、すでに準備されていた（誉田慶信 2011）。

平泉の歴史は、10～12 世紀の東アジア世界で展開していた「地方の時代の深化」「周辺諸民族の台頭」という、大きな潮流のなかにあった。平安時代から鎌倉時代、そして室町時代へと、一直線に発展するような京都・鎌倉中心の歴史発展だけでは、とうていとらえきれない多様なる歴史発展。それを浮かび上がらせたのが、「仏土平泉」「12 世紀の奥羽世界」「平泉幕府」であった。

おわりに

平氏政権は、1159 年の平治の乱から 1185 年の壇ノ浦合戦まで、わずか 26 年間の歴史であった。鎌倉幕府 150 年間は、血なまぐさい歴史に彩られていた（高橋昌明 2013）。平泉藤原氏は、京都派遣の武士の奥羽世界への介入を許さず、柔軟で国際的感覚に満ちた政治姿勢のもと、奥羽に仏教最優先の「平和社会」を約 100 年間、矛盾を内包しつつも、とにもかくにも持続させた。この「事実」が有する歴史的意味は大きい。日本史上、類い希なる仏土平泉では、連日のごとく仏会が行われていた。仏の「教え」と、人びとの敬虔なる「行」と「信」こそが、奥羽をして仏土ならしめたのである。平泉藤原氏は、仏教最優先の平和共存主義を、京都、関東、奥羽在地世界、北方蝦夷地社会、そして中国に向かって発信し続けたのである。

奈良時代末期に発生した「37 年戦争」から 11 世紀後期の後三年合戦にいたる実に 300 年間の、日本史上類例のない「戦争の時代」を奥羽の人びとは経験した。それ故に、戦争への反省、平和な社会への念願は、他の地域のどこにも増して強かったのである（誉田慶信 2008、樋口知志 2011、野中哲照 2014）。平泉仏教を見つめるほどに、透けて見えてくる、歴史の重みである。

1945 年８月、アジア・太平洋戦争の敗戦以来、70 年間、戦争のない平和な日本社会が続いてきた、という紛れもない「事実」。そのような歩みを有する現代の日本は、仏国土平泉に通底している、と思わずにいられない。平泉を研究し、その文化遺産の「人類的」意味を発見し続ける若者を育てていくこと。それがいかに大切なことか。最期に、改めて確認するものである。

［引用文献］

阿部泰郎 2005「総説」国文学研究資料館編『真福寺善本叢刊第二期 11　記録部五　法儀表白集』臨川書店
入間田宣夫 2004「藤原秀衡の奥州幕府構想」上横手雅敬編『源義経　流浪の勇者―京都・鎌倉・平泉―』文英堂
入間田宣夫 2007「平泉藤原氏による造寺・造仏の国際的意義」『アジア遊学』102 号
入間田宣夫 2014a『平泉の政治と仏教』「中尊寺造営にみる清衡の世界戦略」高志書院、初出 1997
入間田宣夫 2014b『平泉の政治と仏教』「御館は秀郷将軍嫡流の正統なり」高志書院、初出 2009
入間田宣夫 2014c『藤原清衡　平泉に浄土を創った男の世界戦略』集英社
入間田宣夫 2015『藤原秀衡』ミネルヴァ書房
遠藤巖 1976「中世国家の東夷成敗権について」『松前藩と松前』第９号
遠藤基郎 2005「平泉藤原氏と陸奥国司」入間田宣夫編『東北中世史の研究　上巻』高志書院
遠藤基郎 2008『中世王権と王朝儀礼』「天皇家王権仏事の運営形態」東京大学出版会
遠藤基郎 2015「基衡の苦悩」柳原敏昭編『平泉の光芒』吉川弘文館
大曽根章介 1997「院政期の鴻人」『国語と国文学』54 巻８号
大矢邦宣 2004「『中尊寺供養願文』を読む」『中尊寺仏教文化研究所　論集』第２号
大矢邦宣 2013『平泉』河出書房新社
柿島綾子 2013「12 世紀における仁和寺法親王」小原仁編『「玉葉」を読む』勉誠出版
川勝賢亮 1984「天台多宝塔の本尊」川勝編『多宝塔と法華経思想』東京堂出版
菅野成観 1991「平泉無量光院考」『岩手史学研究』第 74 号
菅野成観 2002「平泉の宗教と文化」入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院
菅野成観 2006「中尊寺十界阿弥陀堂の成立」『宮城歴史科学研究』第 60 号
菅野博史 2001『法華経入門』岩波書店
工藤雅樹 2009『平泉藤原氏』無明舎出版
小松茂美 1973『平等院鳳凰堂色紙形の研究』中央公論美術出版
斉藤利男 2009「北の辺境世界と平泉政権」『説話文学研究』第 44 号
斉藤利男 2010「仏教都市平泉とその構造」入間田宣夫編『兵たちの極楽浄土』高志書店
斉藤利男 2011『奥州藤原三代』山川出版社
斉藤利男 2014a『平泉　北方王国の夢』講談社
斉藤利男 2014b「平泉藤原氏と北奥武士の統合」岩手大学平泉文化研究センター設立２周年記念講演、（於）岩手大学
佐々木邦世 1997「よみがえる『信の風光』-秀衡の母請託『如意輪講式』を読む」中尊寺文教文化研究所『論集』創刊号
清水擴 1992『平安時代仏教建築史の研究』中央公論美術出版
高橋富雄 1958『奥州藤原氏四代』吉川弘文館
高橋富雄 1968「岩蔵寺の調査について」岩沼町教育委員会『岩沼町志賀岩蔵寺予備調査報告書』
髙橋昌明 2007a『平清盛　福原の夢』講談社
髙橋昌明 2007b「西の福原と北の衣川・平泉」入間田宣夫編『平泉・衣川と京・福原』高志書院
高橋昌明 2011『清盛以前　改訂版』平凡社
髙橋昌明 2013『平家と六波羅幕府』東京大学出版会

田中塊堂 1953『日本写経綜鑑』三明社
長岡龍作 2010「平泉の美術と仏教思想」入間田宣夫編『兵たちの極楽浄土』高志書院
名兒耶明 1978『平安一藤原朝隆中尊寺建立供養願文（模本）　南北朝一北畠顕家　中尊寺建立供養願文（模本）』二玄社
七海雅人 2015『躍動する東北「海道」の武士団』蕃山房
野中哲照 2014『後三年記の成立』汲古書院
羽柴直人 2002「平泉の道路と都市構造の変遷」入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院
羽柴直人 2014「比爪一もう一つの平泉一」岩手県立博物館
浜田隆 1971「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図」藤島亥二郎監修『中尊寺』河出書房新社
樋口知志 2011『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』高志書院
保立道久 2004『義経の登場』日本放送出版協会
誉田慶信 1995「立石寺」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む 1　蝦夷の世界と北方交易』新人物往来社
誉田慶信 2008「平泉・宗教の系譜」『季刊東北学』16 号
誉田慶信 2010「平泉・宗教の系譜」入間田宣夫編『兵たちの極楽浄土』高志書店
誉田慶信 2011「藤原泰衡」『平泉と奥州藤原四代のひみつ』新人物往来社
誉田慶信 2013a「日本中世仏教のなかの平泉」『平泉文化研究年報』第 13 号
誉田慶信 2013b「平泉造園思想に見る仏教的要素」藪敏裕編『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
誉田慶信 2014「平泉仏教の歴史的性格に関する文献資料学的考察」『平泉文化研究年報』第 14 号
誉田慶信 2015「院政期平泉の仏会と表象に関する歴史学的研究」『平泉文化研究年報』第 15 号
八重樫忠郎 2013「平泉・毛越寺境内の新知見」橋口定志編『中世社会への視角』高志書院